

## 日本海図地名にみられる浅瀬呼称の地域性<sup>†</sup>

河合晃司<sup>\*1</sup>, 社 泰裕<sup>\*1</sup>, 藤井智雄<sup>\*2</sup>

Regional variations in the naming of shoals appeared in Japanese Nautical Charts<sup>†</sup>

Koji KAWAI<sup>\*1</sup>, Yasuhiro KOSO<sup>\*1</sup>, and Tomoo FUJII<sup>\*2</sup>

### Abstract

Nautical charts include the names of shoals as hazards to be avoided during navigation and generally the names used locally are adopted. Shoals exist throughout Japan, but this paper focuses on the regional variations in the terminology used to refer to shoals in place names. This paper also explains the generally unfamiliar terms used to refer to shoals, such as “Sori,” “Mo,” “Sowai,” “Motare,” “Birashi,” “Berashi,” “Tako,” and “Heta.” Furthermore, regarding the term “reef” (礁), which is found nationwide with various local pronunciations, this paper points out the possibility that the kanji character “礁” was later applied to these regional pronunciations based on their distribution.

### 1 はじめに

海上保安庁が刊行する航海用海図（以下「海図」という。）には、航海上避けるべき危険物として浅瀬の地名が記載されており、原則として現地において使用されている地名を採用している。浅瀬の地名が記載されている箇所は孤立した岩場の浅瀬のほか干出や小島もあり、航海において特に注意が必要な箇所である。

日本近海には、古くから船乗りに使用されている方言が元になった浅瀬の地名が多くあり、海図に記載されている。陸上の突端の地名であれば、その地形的特徴を示す呼称として語尾に「岬」や「埼」若しくは「鼻」が付くように、浅瀬の地名には、浅瀬の地形的特徴を示す多様な呼称が語尾に付けられている。

例えば、語尾に付く浅瀬の呼称として、根

(ネ)、曾根(ソネ)、瀬(セ)、堆(タイ)、碇(ハエ)、沚(シ)、磯(イソ)、グリ、礁、ソワイ、ソワ、石(イシ)、岩(イワ)、ビラシ、出シ(ダシ)、ツガイ、喰合(くいあい)、藻(モ)、アサリ、黒ミ、モタレ、ヤマ等があり、それらの複合した名称も存在している。これらの中のいくつかの浅瀬の呼称については、「日本近海における浅瀬の名称についての一考察」(跡部, 1966)で解説されている。

こうした浅瀬の呼称については、日本全国普遍的に分布しており、「瀬」や「礁」等のように、一瞥してそれが浅所であることが分かるものもあるが、一般的に意味が分かりにくいものも多い。本稿では、海図に記載されている地名のうち、広域に分布する浅瀬の呼称に関する全国的な分布状況について考察し、さらに一般的に意味が分かり

<sup>†</sup> Received September 16, 2025; Accepted October 6, 2025

\* 1 情報管理課 Marine Data Management Division

\* 2 技術・国際課 海洋研究室 Ocean Research Laboratory, Technology Planning and International Affairs Division

にくい浅瀬の呼称について、今回意味や由来等が判明したいくつかのものについて報告する。また、浅瀬の呼称として全国に分布し、様々な呼び方をされる「礁」についても考察を行う。

なお、海図は航海用として調製された主題図であり、刊行海域によっては図の縮尺に違いがあるため、全ての浅瀬の名称を網羅しているわけではない。

## 2 広域に分布する浅瀬の呼称

浅瀬の呼称の分布については、「海岸の地名礁、瀬戸等の分布 (1)」（鏡味, 1942）に海図や「日本沿岸地名表」（水路部, 1932）を利用して「瀬」、「磯」、「礫」、「根」、「曾根」、「神」、「クリ」の分布について、北海道など一部の地域（海域）を除いて報告されている。

今回は、特に地域的に偏在する傾向が強く認められる「根」、「曾根」、「礫」、「グリ」が付く呼称

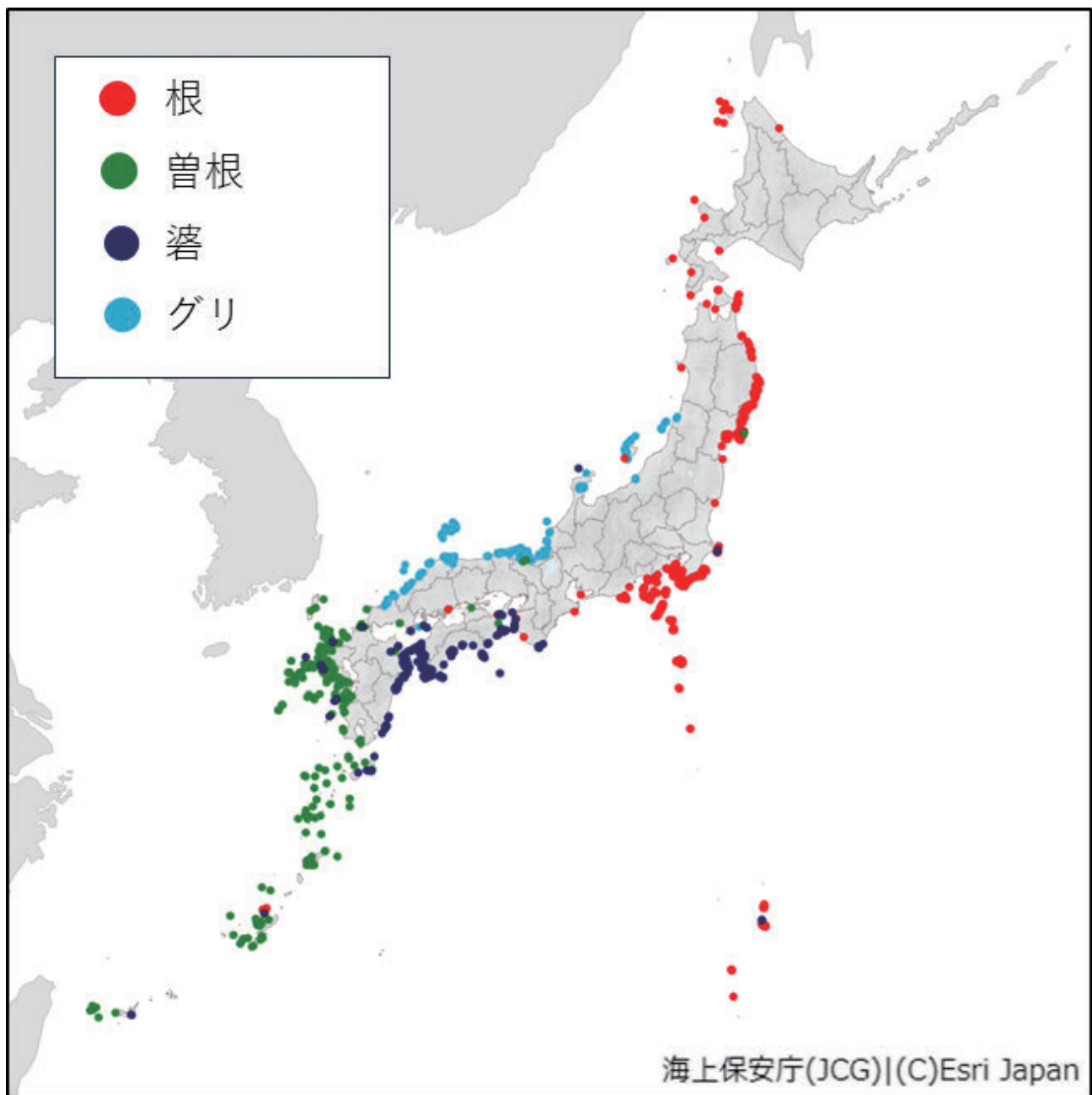


Fig. 1. Map showing distribution of the undersea feature names with “Ne”, “Sone”, “Bae” and “Guri” in Japan.

図1. 「根」、「曾根」、「礫」、「グリ」の全国の分布図。

について、現在刊行されている海図に基づき改めて全国の分布状況を示した (Fig. 1). 分布状況を示すにあたり「根」, 「曾根」, 「礫」については、海図の表記が漢字でないものや複合している呼称 (例: 曾根グリ) については除いている。

「根」が付く浅瀬は、約 700 箇所, 「曾根」, 「礫」が付く浅瀬は、それぞれ約 300 箇所, 「グリ」が付く浅瀬は約 250 箇所と比較的数が多く存在しており、いずれも広範囲に分布しているが、呼称により偏りがあることが分かる。

「根」は、主に北海道西側～本州南・東岸～南方諸島に多く分布している。その他の海域では佐渡島、瀬戸内海、南西諸島にもわずかな分布がみられるが、広範囲に集中した分布域はみられない。

「曾根」は、主に九州西岸～南西諸島に多く分布している、その他の海域では、舞鶴湾や瀬戸内海などにもみられるが、広範囲に集中した分布域はみられない。

「礫」は、紀伊半島南岸～紀伊水道付近～四国南岸～豊後水道付近～九州東岸に多く分布している。その他の海域では九州北西岸、銚子沖、能登半島、南西諸島、小笠原諸島などにもみられるが、広範囲に集中した分布域はみられない。「礫」は、「はえ」又は「ばえ」と呼称するが、佐伯湾から宮崎県北部の海域においては、「礫」の代わりに「礁」や「礮」の字をあてて「ばえ」と読ませているものもある。

「グリ」は、本州北西岸に分布しており、特に山口県角島付近～鳥取県美保湾～隠岐諸島、鳥取県東部から福井県沿岸、七尾湾、佐渡島北西部、粟島付近に多く分布している。その他の海域では広範囲に集中した分布域はみられない。「礁」の字をあてて「ぐり」と読ませているものもある。この詳細については、後述する。

「グリ」の付く浅所の呼称では、鏡味 (1942) において、「唯一つ磐城 (常磐) の監屋岬 (塩屋埼) の近くに浅深礁 (グリ) がある」と指摘されているが、現在の海図においては「浅深礁 (しょう)」と修正されている。当時の海図においては

「浅深礁」の読みは確認できないが、「日本沿岸地名表」(水路部, 1932) においては「Asabuka Guri」の記載がみられる。この「浅深礁」の読みの変遷の経緯については、資料等は残されていない。

このように、同じ浅瀬を示している呼称ではあるが、その呼称の分布域は、いくつかの例外はあるものの、地域性があることがわかる。

### 3 意味の分かりにくい浅瀬の呼称について

浅瀬の呼称については、地元の方言などに基づくものも多く、意味の分かりにくいものがある。本稿ではそうした意味の分かりにくい語である「ソリ」, 「藻 (モ)」, 「ソワイ」, 「ピラシ」, 「ベラシ」, 「モタレ」について解説を行う。また、浅所の地名の語頭や語尾に付いて、形容詞としてその位置を示している「タコ」と「ヘタ」についても解説を行う。

#### 3.1 「ソリ」

「ソリ」や「ゾリ」の付く呼称は北海道に特有の浅瀬の表現である。これらは北海道全域に浅所、暗岩、干出そして島の呼称として 10 数箇所ほど存在しており、特に渡島半島から礼文島にかけての北海道西部にみられる。「ソリ」は明治 36 (1903) 年刊行の海図 (海図第十一號) に既に記載されている (Fig. 2)。「ソリ」の語源については、「北海道方言辞典」(石垣, 1991) の「ソリ」の項に「暗礁. ジンプとも言う。」との記載があり、また「松前・白神」にて採取された言葉であることが記載されている。「松前・白神」付近においては、現在、海図 W22「北海道西岸南部諸分図第 1- 松前港付近」が刊行されており、この中で「伝兵衛ゾリ」や「中ゾリ」などの浅所の呼称をみることができる (Fig. 3)。前述の「北海道方言辞典」に言及のあった「ジンプ」については「北海道海岸部方言の共通語化 (1)」(見野, 2004) に「暗礁, 海中の岩。」との説明があり、こちらは北海道の渡島半島東部にある「楳法華 (とどほっけ)」(現在の函館市恵山岬付近) にて



Fig. 2. “Sori” on the Japanese Chart No.11 (published in 1903).  
 図2. 海図第十一號（明治36（1903）年刊行）に記載された「ソリ」.

採取された言葉であることが記載されているが、この「ジンプ」に関しては海図への記載はみられない。

また、漁業従事者が利用する地名についてまとめた「渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について」（橋本，2012）には「カジカソリ」を例に、＜カジカ（鰈）：名詞＋ソリ（暗礁）：名詞＞との説明があり、地形の特徴から名付けられたと考えられ、アイヌ語に由来するものではないと報告されている。また、アイヌ語には「ソリ」という語やそれに近い音の語で暗礁の意味を表す語彙が見つからないこと、また、この語彙が採取された松前という土地柄を踏まえると、「ソリ」がアイヌ語を起源とする可能性は低いと考えられる（吉川佳見研究主査・北海道立博物館，私信）。

### 3.2 「藻（モ）」

「藻（モ）」は、瀬戸内海一帯に多く見られる呼称であり、50箇所ほど存在している。これらは、水中に生ずる藻類、海藻、水草などの称であり、岩礁の状態がそのまま呼び名になったものと思われる。その他、末尾に「モ」が付いている呼称と

して「ガラモ」、「シヅモ」等がある。

### 3.3 「ソワイ」

「ソワイ」や「ゾワイ」は瀬戸内海の香川県の小豆島から広島県尾道市の海域を中心に集中しており、50箇所ほど存在している。広島県東部周辺では「ソワイ」の「イ」を省略して「ソワ」と呼んでいる。これらについては、他の海域にはみられない浅瀬の呼称である。「ソワイ」は明治39（1906）年刊行の海図（海図第百三十七號甲）には「soai」の表記でそのいくつかが記載されており、昭和3（1928）年刊行の海図（海図第137號A）以降はカタカナ表記で記載されている（Fig. 4）。「日本の地名 付・日本地名小辞典」（鏡味，1964）においては、「ソワイ」は「暗礁」との記載があるが、それ以上の説明は無く、また同書では海図にも掲載がある「百間ゾワイ」や「カタビラゾワイ」などが例として紹介されている。また、鏡味（1942）においても「ソワイ」は岡山、香川両県間の瀬戸内に多く分布し、そのほとんどが暗礁である旨指摘されている。

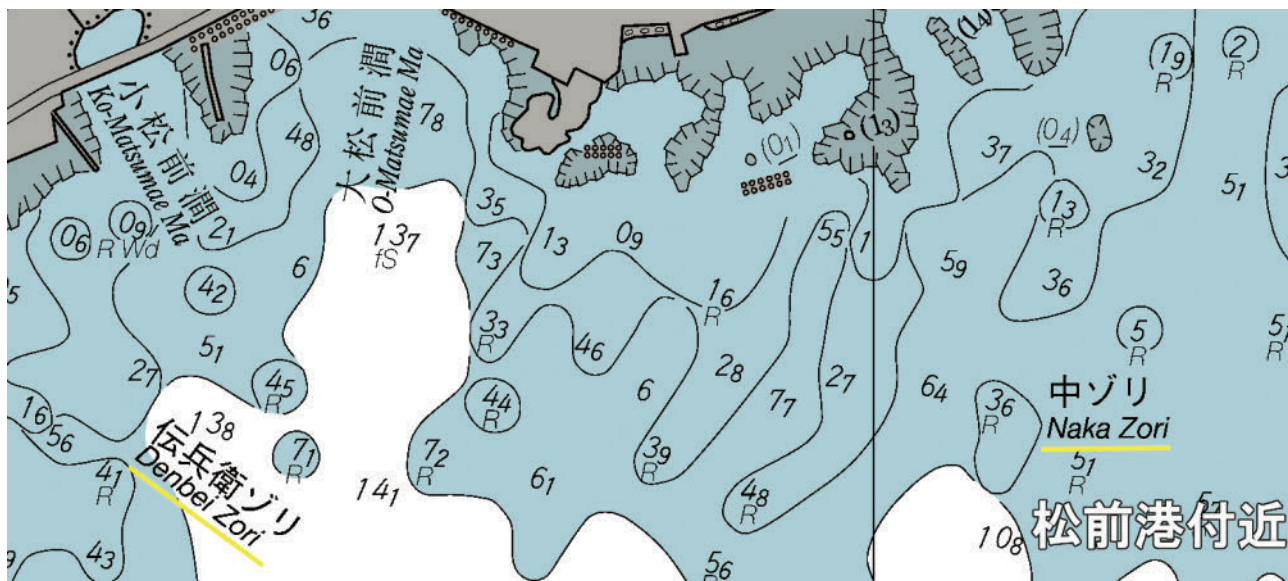


Fig. 3. “Denbei Zori” and “Naka Zori” on the Japanese Chart W22 (published in 2009).  
 図3. 海図 W22 (平成 21 (2009) 年刊行) に記載された「伝兵衛ゾリ」と「中ゾリ」.

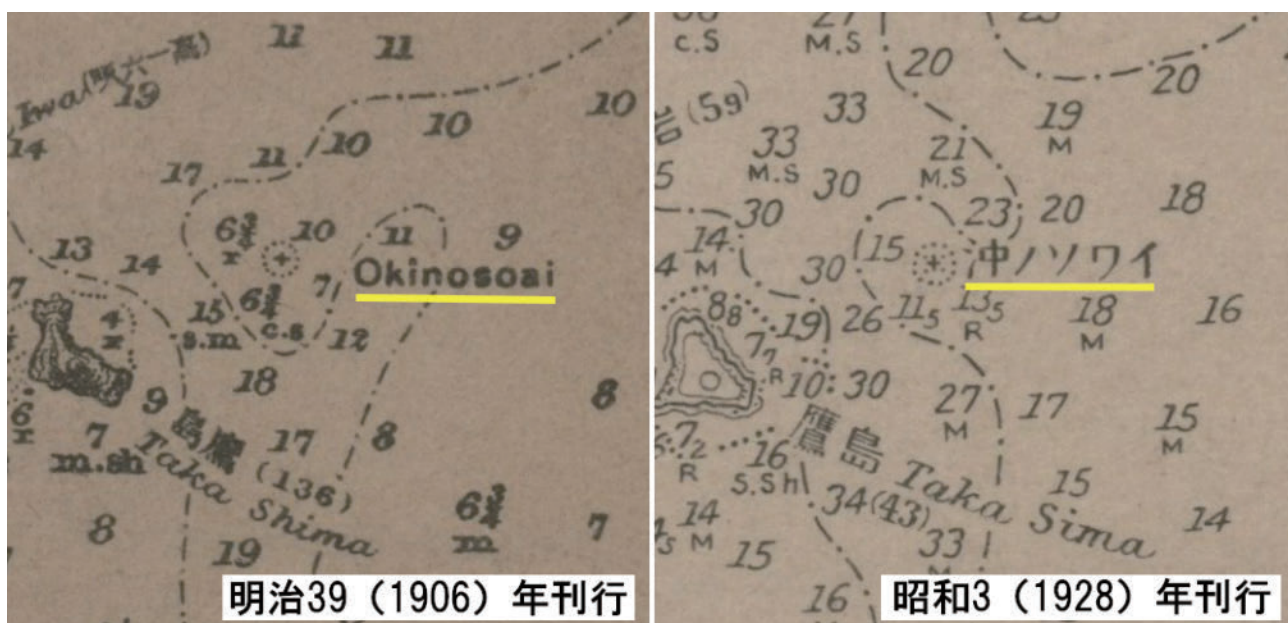


Fig. 4. “Soai” on the Japanese Chart No.137A (published in 1906) and “Sowai” on the Japanese Chart No.137A (published in 1928).  
 図4. 海図第三百七號甲 (明治 39 (1906) 年刊行) に記載された「soai」及び海図第 137 號 A (昭和 3 (1928) 年刊行) に記載された「ソワイ」.

### 3.4 「ビラシ」, 「ベラシ」

「ビラシ」や「ベラシ」は三重県の志摩市南部から和歌山県の北牟婁郡紀北町の沿岸部に 30 箇所ほど存在する浅瀬の呼称であり、これ以外の地域には全くみられないものである。「ビラシ」は明治 36 (1903) 年刊行の海図 (海図第七十六號) には既に記載されている (Fig. 5)。「ビラシ」に

関しては三重県南勢町からの地名調書 (南勢町, 1963) において「海底が広い瀬のこと」との説明がある。また、「ベラシ」に関しては、三重県海山町からの地名調書 (海山町, 1963) において古老の話として、「暗礁のことを「ヒラセ (平瀬)」と呼んでおり、この「ヒラセ (平瀬)」が訛って「ベラシ」となったのではないか。」との説明があ

る。「平瀬」については、地元でも「シラシ」、「ビラシ」など訛って呼ばれていたようであり、これらが浅瀬の呼称として定着していったものと考えられる。

### 3.5 「モタレ」

「モタレ」は千葉県の銚子港沖やいすみ市沖に集中して10箇所ほど存在している浅所の呼称である。「モタレ」は、昭和8（1933）年刊行の海図（海図第87号）から銚子港沖及びいすみ市沖ともに記載が確認できる（Fig. 6）。また「モタレ」は、「日本近海における浅瀬の名称について

の一考察」（跡部，1966）では字義が明らかではないとされている。しかし、千葉県夷隅郡岬町からの地名調書（岬町，1962）に「モタレ」はその位置を知るために陸上に一定の目標になる、主として高い山などを選んでその目標を二方向におき、その目標から直線を引きその交差を出す方法を意味する。一定の目標に「モタれる」という意。」との説明がある。これを踏まえると、「モタレ」は、陸上の目標から浅瀬の位置を導くことが由来となる呼称として捉えることができ、「出シ」や「ツガイ」あるいは「喰合（くいあい）」と同類であると考えられる。

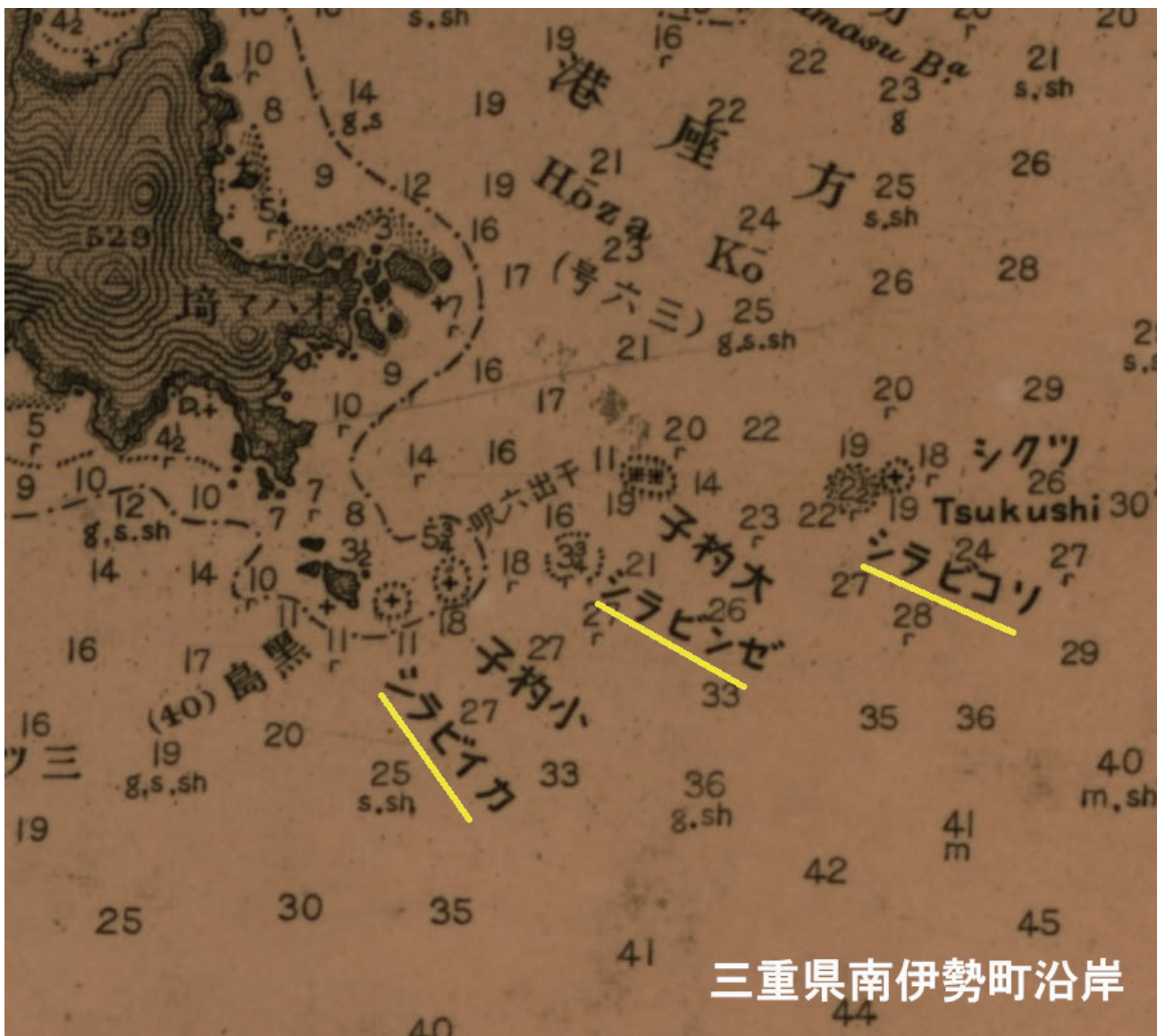


Fig. 5. “Birashi” on the Japanese Chart No.76 (published in 1903).

図5. 海図第七十六号（明治36（1903）年刊行）に記載された「ビラシ」。

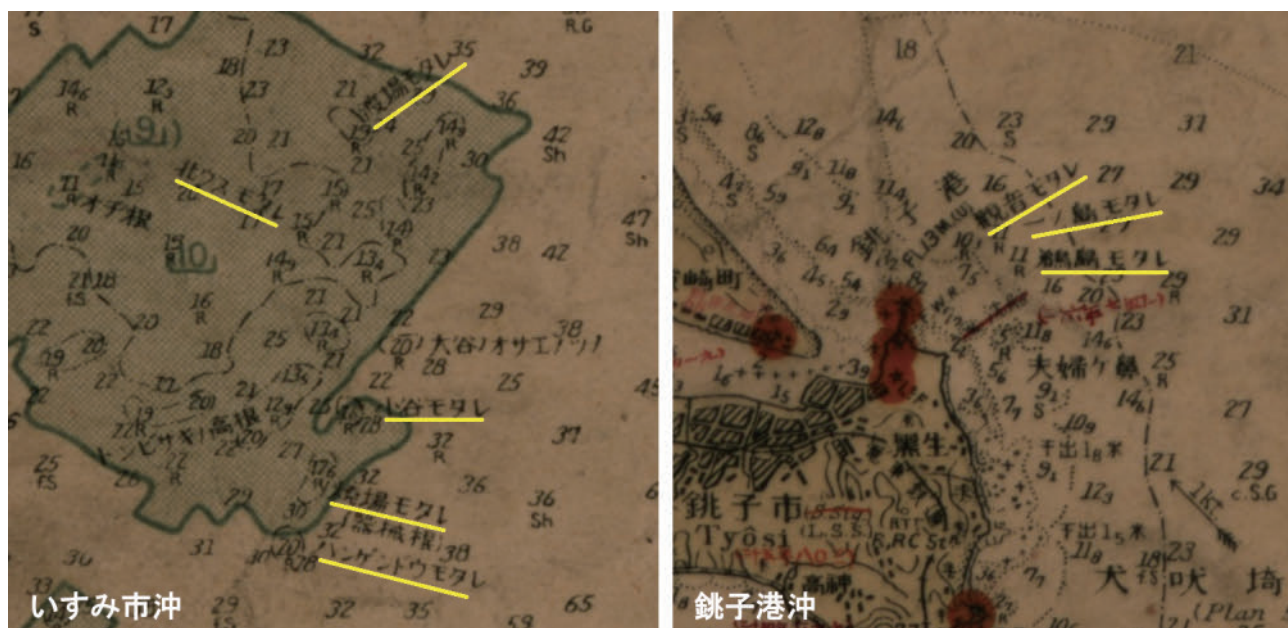


Fig. 6. “Motare” on the Japanese Chart No.87 (published in 1903).

図6. 海図第87号（昭和8（1933）年刊行）に掲載された「モタレ」.

### 3.6 「タコ」と「ヘタ」

「タコ」と「ヘタ」は、浅所そのものを示す言葉ではなく、形容詞として浅所の位置を示す言葉である。鹿児島県宝島の北西方に、「中ノ曾根タコ」および「五号曾根タコ」という海底地形としては堆に分類される浅所の名称がみられる。これらは1986年に開催された第13回海洋地名打合わせ会において決定された海底地形名であり（海上保安庁海洋情報部）、その名称の由来としては「地元慣習名」と記載があるが、意味等についての言及は無い。この「タコ」という表現については、「大正期の鹿児島県におけるカツオ漁業の操業実態」（林，2011）に、「ヘタはソネに向かってオカ又は陸地のある方向を指し、タコはソネに面した時のオキの方向を指す」との記載があり、さらに林（2011）には、「明治四十三年度鹿児島県水産試験場事業報告」からの引用として、「所謂タコトハタカ（高）ノ訛リタルモノニシテ何々瀬ノタコトハ即チ上流二位スル所ヲ呼ブモノナリ」との記載がある。これを「中ノ曾根タコ」および「五号曾根タコ」にあてはめて考えると、「中ノ曾根タコ」及び「五号曾根タコ」にはそれぞれ対となる「中ノ曾根」及び「五号曾根」が存在してお

り、吐噶喇群島を陸側と考えると、「中ノ曾根タコ」及び「五号曾根タコ」は「中ノ曾根」及び「五号曾根」のそれぞれ沖側にあり、「タコ」の説明と整合している（Fig. 7）。

また、「ヘタ」については、海図には語尾に「ヘタ」の付く浅瀬の地名はみられないが、「ヘタノ舵掛」や「ヘタノトー瀬」など、語頭に「ヘタ」の付く地名がいくつもみられる。これらの「ヘタ」の付く浅瀬の地名は「ヘタノ舵掛」では「沖ノ舵掛」，「ヘタノトー瀬」では「沖ノトー瀬」というように語頭に「沖」の付く地名と対になって現れることがある。これらの位置関係は、「ヘタ」の付く浅瀬は、「沖」の付く浅瀬のいずれも陸側に存在しており、前述の「ヘタはソネに向かって陸地のある方向」という説明と整合的であると考えられる。

### 4 「礁」の読みについて

「礁」の付く浅瀬の地名は全国で300箇所ほどみられるが、その読み方については、多様である。「礁」の文字の読みについては、漢和辞典によると「しょう」と「せう」との読みが記載されているが（旺文社，1987）、浅瀬の呼称に現れる

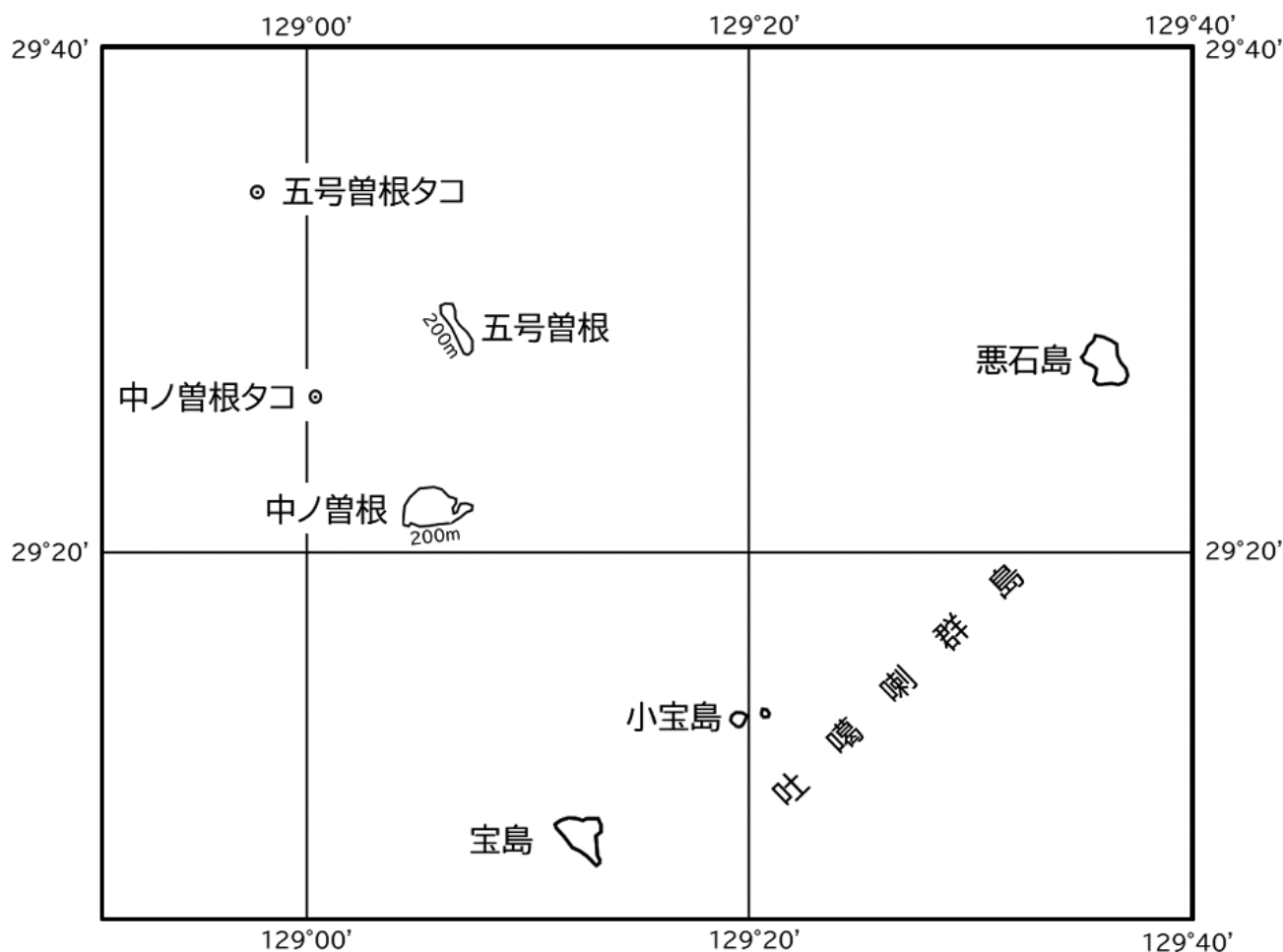


Fig. 7. Map showing the location of “Gogosone Tako” and “Nakanosone Tako”.  
 図7. 「五号曾根タコ」と「中ノ曾根タコ」の配置図.

「礁」の読みはそれだけに止まらない。もちろん「礁」と書いて「しょう」と読む浅瀬の地名は最も多く110箇所ほど存在している。2番目に多いのは、「礁」と書いて「ぐり」と読む浅瀬の地名であり、その数は「しょう」とほぼ同じく100箇所ほど存在している。他に目立つところでは、「ばえ」、「せ」、「べ」の読みがそれぞれ10箇所程度あり、他に「いそ」、「そわい」が数箇所みられる。また、「いし」、「いわ」、「ざ」、「じま」、「ぞね」、「ね」という読み方もわずかではあるが存在する。「礁」の字を用いているが読みが不明な浅所は20箇所ほど存在している。

これら、「礁」の全国の読み方について、日本地図に表示したものをFig. 8に示す。

まず「しょう」と読む浅瀬については、全国的にみられるものの、日本海側においてはほぼみら

れず、能登半島に2箇所みられるのみである。この「しょう」の読みについては、概ね日本の太平洋側全体及び瀬戸内海に分布しているといえる。

一方、日本海側に多くみられるのは「ぐり」の読みであり、これは山口県西部から福井県西部の日本海側の区域および能登半島に集中しており、太平洋側には北海道に1箇所あるのみである。

元々「ぐり」と読む浅瀬の呼称は前述のとおり日本海側を中心に300箇所以上みられるものであるが、そのうち50箇所程度に当てはめられている「礁（ぐり）」は「グリ」とその分布域をほぼ同じくしているものの、「礁（ぐり）」は特に能登半島、福井県小浜湾、隠岐諸島、山口県北部に多くみられる。

そこで、明治時代の古海図により能登半島にある七尾湾（海図第百二十一號）及び隠岐諸島（海

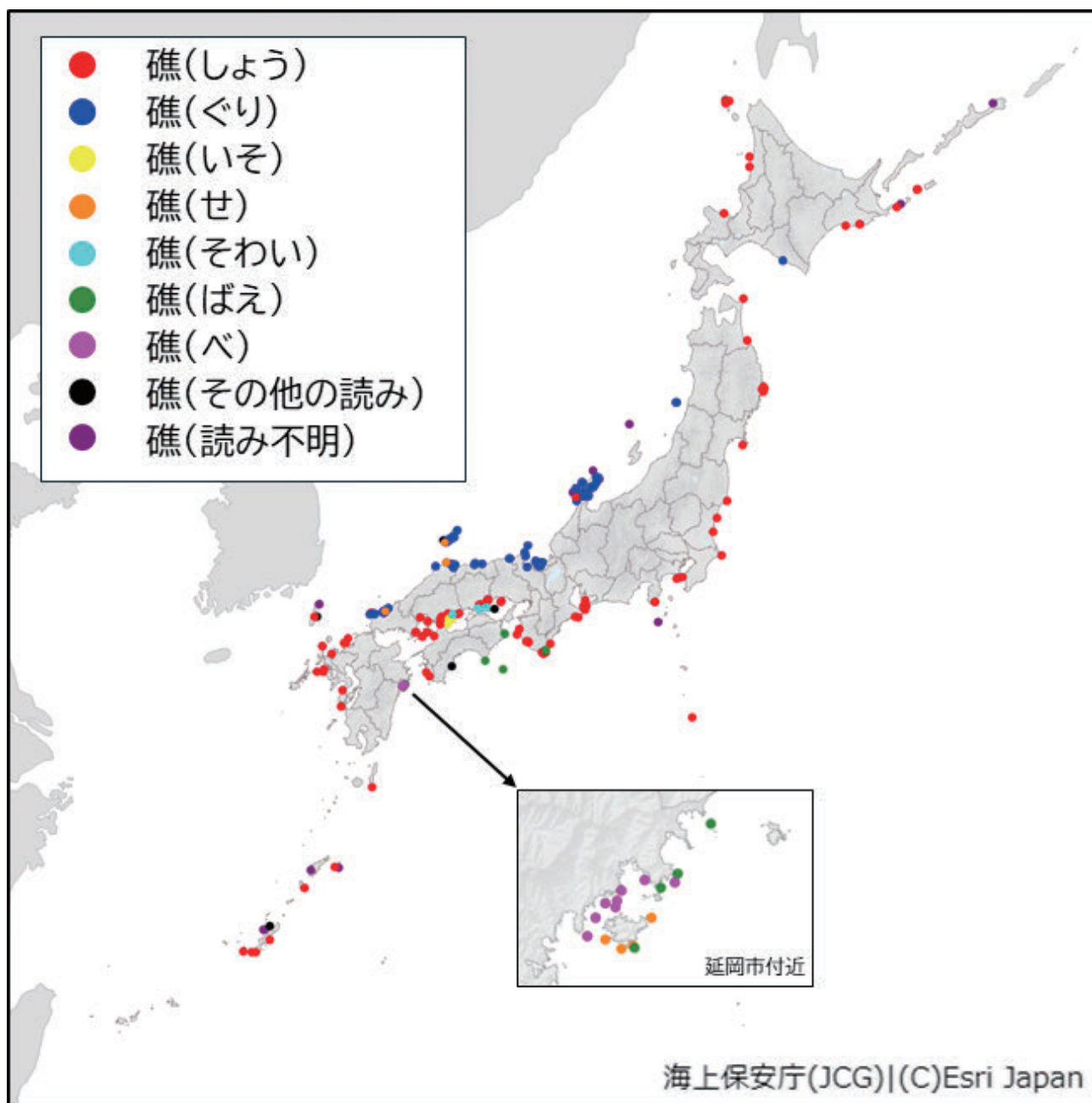


Fig. 8. Map showing distribution of the undersea feature names with kanji character “礁” in Japan.

図8. 礁の読みに関する全国の分布図.

図第二百二十四号)の浅瀬の呼称について記載内容を調査した。Fig. 9に、七尾湾の明治24(1891)年12月刊行の海図と明治39(1906)年3月刊行の海図を比較したものをFig. 10に、隠岐諸島の明治26(1893)年1月刊行の海図と明治36(1903)年12月刊行の海図を比較したものをそれぞれ示す(なお、隠岐諸島においては、海図の番号は同じであるが、明治26(1893)年刊行海図の標題は「隠岐列島」、明治36(1903)年刊行海

図の標題は「隠岐全島」である)。七尾湾において、明治24(1891)年の海図に「グリ」と記載されている浅瀬が、明治39(1906)年の海図では「礁」に複数箇所置き換わっている。また、隠岐諸島の海図も同様に明治26(1893)年7月刊行海図では、「グリ」と記載されていた浅瀬が、明治36(1903)年12月刊行海図では、「礁」に複数箇所置き換わっていることが確認できた。また「グリ」の読みについては、七尾湾において

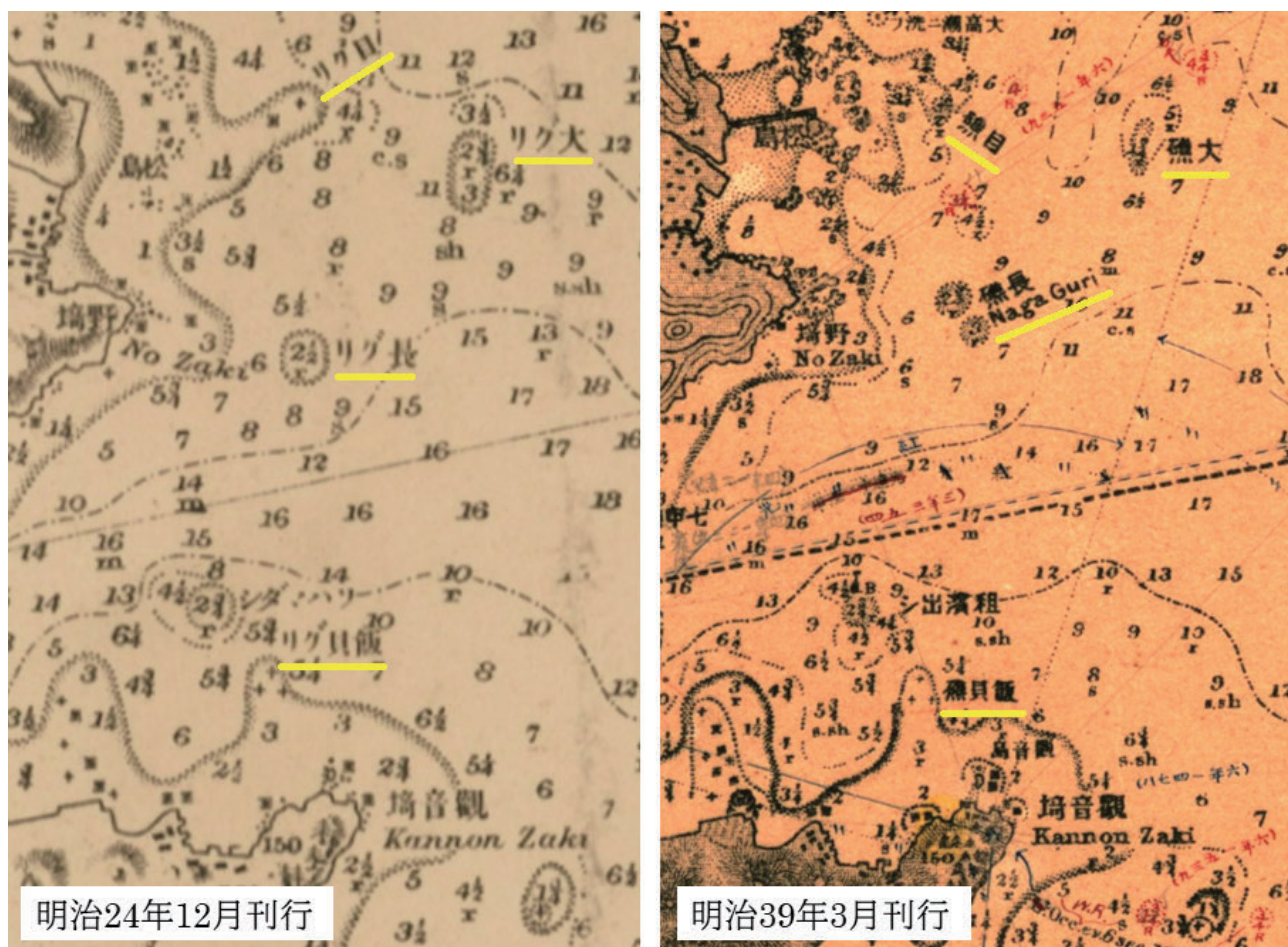


Fig. 9. Comparison of Japanese Nautical Charts No.121 (Nanao Wan) from 1891 and 1906.  
 図9. 海図第百二十一號（七尾湾）の明治24（1891）年と明治39（1906）年の比較。

「長グリ」が「長礁」と置き換わった際、そのローマ字表記は「Naga Guri」とされている。また隠岐諸島においても、「大グリ」、「堺グリ」がそれぞれ「大礁」、「堺礁」と置き換わった際、そのローマ字表記は「O Guri」、「Sakai Guri」とそのまま残されている。こうしたことから、「グリ」から「礁」への変更の際、読みはそのまま残されたものと考えられる。

これらのことから、当時の海図を刊行していた海軍水路部が、明治30（1897）年前後から海図の刊行に併せて、意図的に「礁」に置き換える方針があったのではないかと推察できる。地名はもとより、海図の表現方法も大きく変わっており、この間に海図記載事項の統一を図った可能性がある。

「礁」の全国での読みに戻ると、「ばえ」、「せ」、

「べ」について、「ばえ」は紀伊半島南岸から九州東岸にかけての太平洋側に分布している。「せ」については、7箇所を確認できるが、そのうちの4箇所が宮崎県延岡市の島浦島周辺に集中している。「べ」はこれも宮崎県延岡市の北浦港付近のごく限られた区域に集中しており、8箇所確認できる。

このように「礁」のつく浅瀬は全国に分布しているが、その読みについては、地域で呼称している表現となっており、また「ぐり」、「ばえ」の分布は前述の分布に類似している。こうしたことから地名の「礁」とその読みの関係については、地域で呼称されている読み、浅瀬の意味を持つ「礁」の漢字を当てはめたことが考えられる。さらに、現地調査から取得した漢字を使用したものと海軍水路部の表現の統一によるものの両方が考

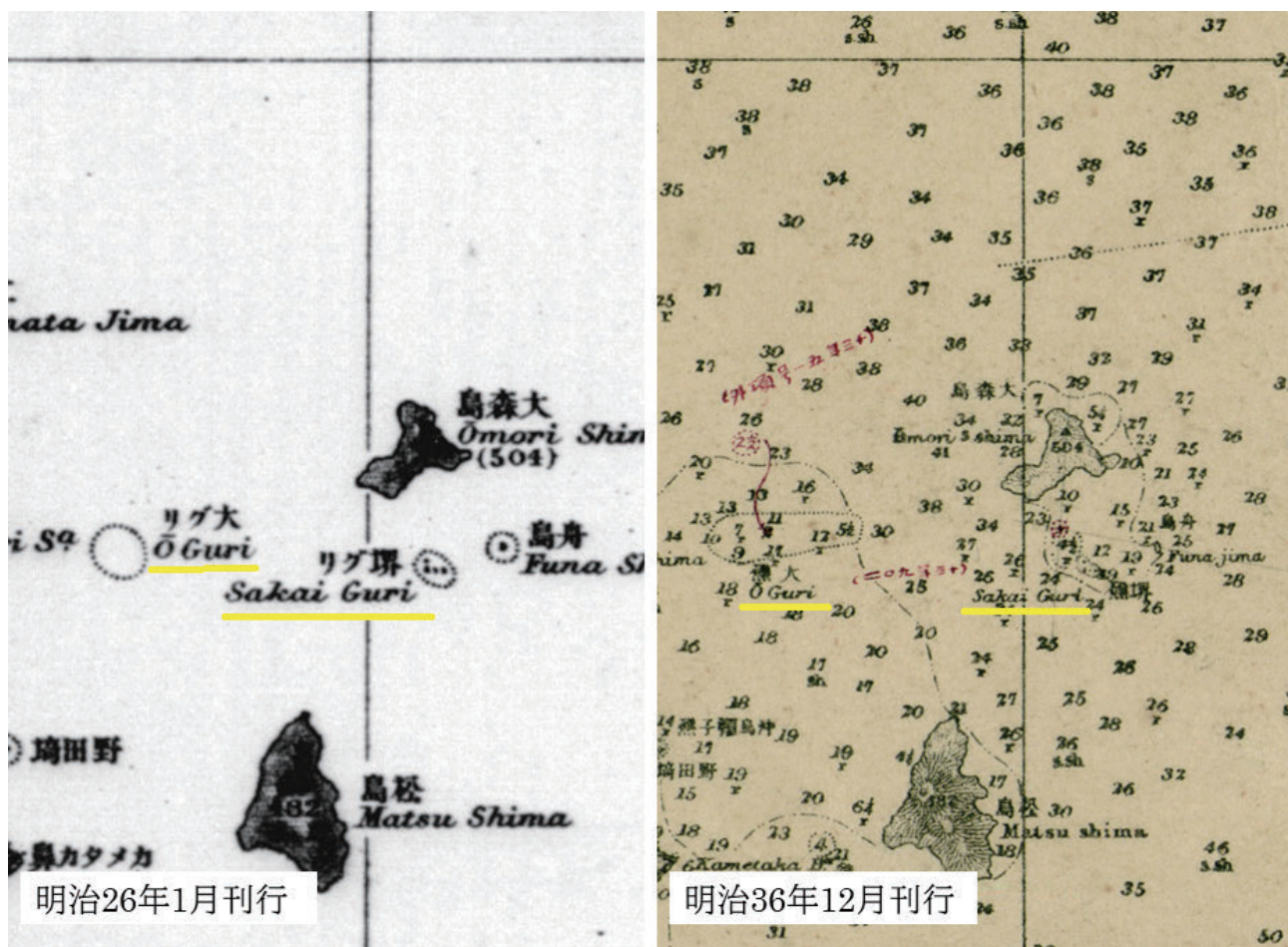


Fig. 10. Comparison of Japanese Nautical Charts No.124 (Oki Shoto) from 1893 and 1903.  
 図 10. 海図第百二十四號 (隠岐諸島) の明治 26 (1893) 年と明治 36 (1903) 年の比較.

えられるが、明治時代の海図記載内容の変遷やそれに関する資料を詳しく調査することで、当時の海図への浅所の名称の表記についての説明が可能になるであろう。

## 5 おわりに

海図には様々な地方の表現に基づく地名が掲載されている。今回は海図に掲載されている浅瀬の名称の分布状況を調査し、また、一般的に意味が分かりにくい浅瀬の名称について、意味が判明したものいくつかの解説や文献の紹介などをおこなった。

浅所の名称については航海や漁業に欠かせないものであると同時に、その地方の方言による表現を色濃く残しており、跡部 (1966) にもあるとおり、我が国民族史を考察するための貴重な資料と

なりうるものと考えられる。こうした海図に記載する地名の意味や地域性について、可能な限り把握して伝えていくことは重要と考える。

本稿を通して、少しでも浅瀬の呼称に関心が向けられれば幸いである。

## 謝 辞

北海道特有の浅瀬の呼称である「ソリ」に関して有益な情報を頂きました北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究主査の吉川佳見様に記してお礼申し上げます。また、これまで海図地名に関わられた皆様に敬意を表するとともに、本稿の作成に当たり適切なお指摘・ご助言をいただきました査読者様及び海洋情報部職員の皆様に感謝の意を表します。

## 文 献

- 跡部 治 (1966) 日本近海における浅瀬の名称についての一考察, 地図, 4-1, 29-33.
- 石垣福雄 (1991) 増補改訂版 北海道方言辞典, 北海道新聞社.
- 旺文社 (1987) 漢和辞典, 旺文社.
- 海上保安庁海洋情報部, 海底地形の名称に関する検討会, <https://www1.kaiho.mlit.go.jp/jcufn/jcufn.html>.
- 鏡味完二 (1942) 海岸の地名 礁, 瀬戸等の分布 (1), 地理学評論, 第 18 卷, 7 号, 578-598.
- 鏡味完二 (1964) 日本の地名 付・日本地名小辞典, 角川新書.
- 水路部 (1936) 日本沿岸地名表, 水路部
- 千葉県夷隅郡岬町 (1962) 地名調書, 千葉県夷隅郡岬町, 千葉.
- 橋本邦彦 (2012) 渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について, 室蘭工業大学紀要, 第 62 号, 69-80.
- 林 圭史 (2011) 大正期の鹿児島県におけるカツオ漁業の操業実態—1920 年代の日記の内容分析をもとに—, 地域漁業研究, 51-2.
- 三重県北牟婁郡海山町 (1963) 地名調書, 三重県北牟婁郡海山町, 三重.
- 三重県北牟婁町長島町 (1963) 地名調書, 三重県北牟婁郡長島町, 三重.
- 見野久幸 (2004) 北海道海岸部方言の共通語化 (1) —日本海側・松前町での現況と 22 年間における動態—, 見野久幸.
- 柳田國男 (1936) 地名の研究, 古今書院.

## 要 旨

海図には, 航海上避けるべき危険物として浅瀬の地名が記載されており, 原則として現地において使用されている地名を採用している. 浅瀬は全国に存在するが, 本稿では, 地名にみられる浅瀬呼称の地域性について示した. また本稿では, 浅瀬の呼称として使用されている「ソリ」, 「藻(モ)」, 「ソワイ」, 「モタレ」, 「ピラシ」, 「ベラシ」, 「タコ」, 「ヘタ」という一般的に意味が分か

らない呼称について解説を行った. また, 浅瀬の呼称として全国に分布し, 様々な呼び方をされる「礁」については, その分布から地域で呼称されている読みに, 後に「礁」の漢字を当てた可能性について指摘した.